



想像してもらいたい。

また、ユリアヌス軍の強さも既に万人が知るところだ。前述の通り、野蛮人が戦わずして、平伏す程だ。コンスタンティウス派の将兵もこれに挑みたたくはない。そもそも、これは権力者二人——それも従兄弟同士——の戦である。直属でもなければ、参加する理由が乏しい。そのため、コンスタンティウス派の動きは消極的だ。

ユリアヌスもユリアヌスでこういった者たちを攻めたくない。戦術的にも無用の事である。手を出すなど厳命し、東進を優先させた（おそらく、誰もがホツとしているはずだ）。

そんなわけで、ユリアヌス達は目立った抵抗もなく、東進を続けていた。まさに無人の野を行くが如しである。

勿論、抵抗しようとする者もいた。例えば、ルリキアヌスという将軍がそれだ。

ところが、結局ルリキアヌスは抵抗できなかった。

ルリキアヌスはユリアヌス東進の報せを聞くなり、すぐ配下に集結を命じた。将軍としては当然の判断である。ところがルリキアヌスの配下が集結するよりも先に、ユリアヌスの軍団が襲来したのだ。将軍ルリキアヌスは錬度の差に慄いたが、事態はそれだけではない。市民が歓声を上げて、ユリアヌスの軍団を駐屯地に招き入れたのである。

要するに、ガリアでの成果がここでも功を奏したのだ。ユリアヌスの『善政』を期待して、若き英雄を喜んで迎える市民は少なくない。そして、ルリキアヌスはその犠牲者だったというわけである。

これで戦えと言う方が無理だ。

ルリキアヌスは戦う前に縄で縛られ、ユリアヌスの前に投げ出された。

「……………」

「……………」

二人の間にしばらくの沈黙が流れる。だが、先に動いたのはユリアヌスだ。

「……あー、ま、楽にして下さいな」

ユリアヌスが微笑笑と共にその縄を解くと、ルリキアヌスも露骨に安堵の溜め息をついた。ルリキアヌスは己の義務に従っただけだ。ユリアヌスもこれを敬いこそすれ、恨む気はない。それでなくとも、ユリアヌスの寛容は有名だ。ここでルリキアヌスに危害を加える事はない。——それがわかっていても、やはり不安だったのだろう。

敗軍の将ルリキアヌスは脅えたまま、精一杯の虚勢を見せる。

「み、自ら先頭に立つなど、お、王者の振る舞いではありませんな」

正論だな——ともユリアヌスは思った。だが、口に出したのは別の言葉だ。

「その台詞は汝の主君コンスタンティウスにとっておけばいい」

\*\*\*

その夜、シャハラザードが率直に尋ねてきた。

「何故、斬らなかったのです？」

ユリアヌスは珍しく酒杯——といつても中身は薬酒——を傾けながら答える。

「必要がないからさ」

「賢君と敬うからこそ、苦言を呈します」

シャハラザードが『斬るべし』というのはあのルリキアヌスの首級くびではない。ユリアヌスの中の迷いだと言う。

「これは必然の結果です。そもそも、コンスタンティウスがユリアヌス陛下をガリアの皇帝にした理由をお考え下さい」

「……」

ユリアヌスが黙り込んだので、思わずトゥールトが口を挟む。

「そりゃ、あれだろ。対ゲルマン戦争遂行のため……」

「表向きは、そういうことになっているわね」

「表向きって……」

宦官勢力との暗闘を指しているのかと思ったが、そうでもないらしい。

「ユリアヌス陛下の実兄ガルス様をガリア皇帝にしなかったのは何故？」

「え？」

「六年前のユリアヌス陛下よりは、余程戦争向きだったはずよ」

「それは……」

トゥールトはガルスについてよく知らない。だが、断片的な伝聞を総括すると……ガルスは、トゥールト自身のような——ユリアヌスと真逆の武人肌だったらしい。

そして、武人肌のガルスは任地先で暴政を振るい、結局、処刑された。

——……たしかにおかしい。

「あべこべなのよ。ガルス様は武人肌なのに内地で政治をやらされた。ユリアヌス陛下は文人肌なのに外地で戦争をやらされた。勿論、武人肌が戦争向きとは限らない。文人肌が政治向きとも限らない。でも、常識的に考えれば、逆にすると思わない？」

トゥールトには返す言葉がない。

「コンスタンティウスは決して暗愚ではありません。むしろ聡明です。そうでなければ、政争を勝ち抜くことなどできません。世が世なら、彼は賢帝となれたでしょう」

ユリアヌスですら黙り込んだままだ。

「それ程、賢きコンスタンティウスが人間の向き不向きを知らぬわけがありません。そして、不向きな事をやらせれば、どうなるかも……実際、ガルス様は自滅されました」

そこで、トゥールトも気付く。

「最初から、失敗を口実に処刑するつもりだった……？」

「それは違う！ 一個の人間にそこまで先を見通せるはずがない！」

ユリアヌスは叫ぶ。そして、弱弱しく続ける。

「……現に、僕はガリアで成功したじゃないか……」

「はい。コンスタンティウスにとって『想定外』の大成功だったでしょうね」

つまり、ほどほどの成功か失敗がよかったのだという。大成功を収めた時点でユリアヌスの命は危うかった。シャハラザードはそう主張した。

「だけど……」

そのユリアヌスの言葉を遮って、シャハラザードは物語る。

「東方でもユリアヌス様の評判は聞きました。キリスト教神学でも随分と高い成績をお残しになったそうですね」

ユリアヌスがガリアに派遣された理由は言うまでもなく複合的なものだ。

しかし、その一つに『キリスト教聖職者の手に負えなくなった』というのもある。後世日本では政争に負けた一族の子は寺院で仏教を習わされる。同じようにユリアヌスも教会で神学を習わされた。ところが、元々オタク気質だったユリアヌスにとって、これは水を得た魚だった。新旧聖書の悉くを通読し始めると『僕ももっと勉強したい！』となったのだ。最初こそ、聖職者も神学書を次々読破するユリアヌスに喜んでいた。ところが、徐々に読ませる本がなくなっていく。結果、ユリアヌスは古代の哲学書や多神教の宗教書も読み始めるようになる。勿論ユリアヌスもすぐにはキリスト教を軽んじはしない。ただし、根がオタク気質である。頭の中ではそれらの内容を比較検討せざるをえない。

その結果、後のアイザック・アシモフのように

『*Properly read, the Bible is the most potent force for atheism ever conceived*』

『きちんと読めば、聖書は無神論のための想像しうる最も強い根拠となる』

という境地に近づいてしまったのだ。

(余談だが、このアシモフのようなユリアヌスの苦闘は、後にエドワード・ギボンによって、名作『ローマ帝国衰亡史』でもまとめられ、それをもとにアシモフは傑作『ファウンデーション』を執筆する。筆者はここに歴史における【円環の理】を髣髴とせざるを得ない) キリスト教聖職者達も恐ろしくならしい。

——「今はまだいい。所詮は子供である。ユリアヌスはあらゆる意味で未熟なオタク少年に過ぎない。しかし、いずれは成熟する。年齢を重ね、経験を積み、バランス感覚を具えた時、この少年を教会の理で縛れるのか？ 逆に、ユリアヌスは聡明な改革者として、キリスト教を内側から侵食していくのでは？」

と、聖職者は正帝コンスタンティウスへ婉曲にはあるが、泣きついたのだ。ユリアヌスが背教者と誹謗されながらも、清教徒と賞賛されるのはこの辺りの事情による。

「結局、ユリアヌス様は一代の傑物。凡夫の下風に立たれる器ではありません。ユリアヌス様自身が望んでコンスタンティウスの器に納まるうとしたところで、その器を壊してしま……」

「もういい、黙れ！ 貴様の佞言は不愉快なんだよ！」

ユリアヌスは酒杯を机に叩きつける。

「今更、僕の行いを正当化しても無駄だ！ どの道、もう殺すか殺されるかしかないんだ！」

「……具体的には？」

「当初の計画通りだよ。コンスタンティウスが兵力を集め終わる前にカタをつける。向こうの戦力が整いきれば、こちらが負ける。だが、その前ならこちらが勝つ。王者ではなく、勇者として戦えばいい……！」

ユリアヌスはそう言って酒杯を飲み干す。荒々しく男らしい所作だ。益ますら荒男おぶりといってもいい。

昔のトゥルートなら、こんな男を好んだだろう。いや、ユリアヌスにこういった所作を望んだ時期もあった。しかし、実際にこんなユリアヌスを目にすると、痛々しいとしか思えない。逆にシャハラザードは満足げに、ユリアヌスの杯に酒を注ぐ。その頬を赤く染め、その股をもじもじとさせている。……これ程、鬨り殺したくなる女は初めてだった。

だが、その時だ。伝令兵が駆け込んでくる。

「コンスタンティウス様の遺書が公開されました！」

\*\*\*

「遺書……だと？」

ユリアヌスは酒杯を落とした。

遺書と言う事はコンスタンティウスが死んだと言う事になる。

たしかにコンスタンティウスは病気がちらしい。だが、コンスタンティウスは高齢だ。病の一つや二つ、むしろ自然だと思っていた。

——いや、高齢なのだから、いつ死んでもおかしくないのか？

よく考えれば、ユリアヌスがほぼ無血で東進を続けられた事自体がおかしい。今までこれはコンスタンティウスの大戦略の結果と考えてきた。繰り返すが、戦術や用兵ではユリアヌスが上回っている。だから、細々とした局地戦はあえて避けているだけだ。が、単にコンスタンティウスが病で臥せており、まともな指示を出せなかったと考える事もできる。

シャハラザードも顔面蒼白だった。全ての前提が崩れたと言わんばかりだ。

「ど、どういう事なの？」

「はい。先帝コンスタンティウス様は病の末に、自らの死期を御悟りになられ、この遺書を



東方的な専制に近づいている。でも、ユリアヌス様には共和制への憧れがあり、だからせめて元首制にまでは戻したいと考えている」

「けど、コンスタンティウス二世はその東方的な君主だったんだらう？」

「ええ、そうよ。『王権すなわち神権デーン、神権すなわち王権デーン』と言いそうな程の東方オリエントかぶれね。ペルシャと戦争していながら、当人の本人はそのペルシャの専制君主とほとんど変わらない」

「……お前もしかして、東方やペルシャにいる【専制君主】とかいう生き物が嫌いなのか？」

「嫌いよ」

「シャハラザードはあっさり言った。トゥルルトは驚いた。」

「何で？」

「民の代表者ではなく、ヒトの超越者だからよ」

「シャハラザードのその言葉には強い殺気が宿っていた。元来、トゥルルトには皮膚感覚で敵意や害意を読み取る場所がある。だからこそ、衛士として重宝され、武人として大成しつつある。」

しかし、シャハラザードがこの場で殺意を抱く理由がない。端的に言って……

「意味が分からん」

「あなたにすれば、そうなるでしょうね」

「そう吐き捨て、シャハラザードはさらに酒杯を重ねる。」

「トゥルルトは眉を顰めた。」

後になって思えば、この頃のトゥルルトは素朴な愛国者だったのだろう。民族的、宗教的に同胞であるはずのゲルマンが故郷と家族を踏み躪り、一応は母国であるローマ軍に入ったら、ユリアヌスの様な国家の代表者がいて、彼が復讐を果たしてくれた。そして、そのユリアヌス自身は国家というシステムのために尽力している。

これで国家に好意を抱くなどという方が無理だ。

だから、シャハラザードが母国であるはずのペルシャを嫌っている事が理解できなかった。

「愛国心とかないですよ。仕事です仕事」と彼女自身が語っていたにも関わらず。もつと言えば、その【専制君主】とかいう生き物も、ユリアヌスと同じ皇帝だと聞いて、

「——なら、ペルシャや東方の【専制君主】とかいう生き物も、ユリアヌスみたいな生き物に違いない。」

と、思っていた。

『理屈っぽくて、延々喋り続けて、書物を握って寝台の上で悶えるキモい奴。けど、こいつに従えば、戦争に勝てるし、税金も安くなるから、皆が祭り上げる』

そんなユリアヌスを平均的な皇帝だと思っていたのだ。

話が噛み合わなくなるわけだ。

そして、シャハラザードはさらにさらに酒杯を重ねる。

「……てか、お前、飲み過ぎなんじゃ？」

「うるさいわねー。これが飲まずにはいられますかっつての！」

シャハラザードの碧い瞳は既に潤んでいた。

「わたし、あれだけ煽ったのよ？ 煽って煽って煽って……この様よ？」

「……まー、コンスタンティウス二世の引き立て役だったな。あれ以来、ユリアヌスも『先帝陛下』『先帝陛下』と尊び始めたし」

勿論、ユリアヌスの態度には政治的意義も強いはずだ。つまり、自分がコンスタンティウス二世の正当後継者でもある事を内外に示す喧伝だ。

……しかし、本来それを真っ先に指摘するはずのシャハラザードはただ嘆くばかりだった。

「あー。もう嫌あー。絶対軽蔑されたあー。佞臣街道まっしぐらー。好感度下がりがくりー」

「そう言うなよ。別に罷免された訳じゃないだろ。それにユリアヌスへの明確な害意があった宦官の首魁の……えーと、エウセビウスだっけ？ そいつですらお咎めなしなんだし」

「お咎めなしっていうか、関わりたくないって感じだけだね……」

実際、この後エウセビウスが幾つかの不正で告発されるが、ユリアヌスは『多忙だから』と、その裁判に臨席すらしない。ユリアヌスが多忙なのは事実だ。しかし、仮に暇だったとしても、エウセビウスの処罰に関わったとは思えない。……潔癖なユリアヌスからすれば、讒言で人を陥れるエウセビウスはこの世で最も嫌いな人種だ。さらに被害者は自分だ。八つ裂きにしても足らぬだろう。しかし同時に、自分が最高権力者になり、その復讐を遂行できる立場になれば、『いや、皇帝たる者が私的な恨みからられて、いいものだろうか？ そんな事よりも、まずは国家と市民のために（以下略）』とでも考えるのだろう。

キリスト教についても同じだ。

ユリアヌスはキリスト教徒ではない。既にユリアヌスはそれを隠す事もなかった。しかし、皇帝ユリアヌス個人がキリスト教徒でないからといって、キリスト教徒を迫害する公私混同は、ユリアヌス自身が許さないだろう。

勿論、その逆もまた然りなのだが……。

「あいつ、頭でっかちだからなー」

「あの人、頭でっかちだもんねー」

皇帝側近の娘二人は、ユリアヌスをそう評した。

「で、その皇帝陛下の指示なのかしら？」

「……」

トゥルートは口籠った。実際その通りなのだ。

シャハラザードを慰めに行つて欲しい——というユリアヌスの頼みがあったからだ。

「あはは……、ユリアヌス様ったら、本当にお優しいわよねえ。そのお優しい皇帝陛下に道を

誤らせた馬鹿女にも、ちゃんとお気づかいができるんだから」

そして、シャハラザードはさらに杯を重ねる。明らかによくない飲み方だった。

「そりゃあ、エウセビウスも罪を問われないわ……って、よくよく考えれば、わたしのやった事はエウセビウスと同じ？　じゃあ、エウセビウスを処罰しなかったのって、わたしの責任を問わないために……？」

「そう言うなって。最終的に決断を下すのはユリアヌスの仕事。あたしもお前も所詮は駒こまさ。責任を負う必要はない」

「ひつく。でもわたし、凄く独断専行していたんだよ。今だから言うけどね、正帝推戴の時、ユリアヌス様に無断で反对者の口を……」

「あーあー、聞こえない！」

トゥルートは慌てて耳を塞いだ。シャハラザードはそれをジト目で睨みつける。

——ユリアヌス……あたしには無理だ。こんな酔っ払いをどう『慰める』というんだ？

そんな風にトゥルートが主命を嘆いていると、シャハラザードは結論を出してくれた。

「じゃあ、トゥルート姉さま……わたしを慰めて！　女の子的な意味で！」

「うわっ、離れろっ！！」

\*\*\*

「疑心暗鬼だったのは僕の方だったのか？」

ユリアヌスは単独皇帝の玉座で書類と向き合いながら自問していた。

コンスタンティウスの立場になれば、当然あり得た選択だった。何しろ、あの時点でコンスタンティウスは四十五歳だ。この時代としては既に初老であり、最早血気盛んな年齢ではない。

——ユリアヌスと戦って、仮に勝てたととしても、その後どうする？

という程度は考えないはずがない。

自分で言うのもなんだが、ユリアヌスの用兵も配下の部隊も、戦術規模では無敵に近いのだから。かつてのハンニバルよろしく、戦略的に封じ込めるのに成功したとしても、国土は荒れ果てる。その荒れ果てたローマに、東方からペルシャ帝国が襲いかかってくれば、ひとたまりもない。おまけにガリアをはじめとするローマ帝国西方はコンスタンティウスを恨む。昔から色々あつて、コンスタンティウスはローマ帝国西方に評判がよくない。ユリアヌスを西方派遣したのも、それを考慮しての人気取りでもあった。しかし、そのユリアヌスを殺せば、事態の收拾はますます困難になる。

コンスタンティウスが二十歳の頃——ユリアヌスの父が殺された頃——も、これと似た状況

だった。その混乱をコンスタンティウスは何十年もかけて何とか收拾したのだ。ユリアヌスを殺すという事は、五十近くにもなつて、その成果を自らぶち壊すという事だ。

——それならいつそユリアヌスを後継者にしてしまえばいい。

——というのは当然あり得る（元々『副帝』カエサルとはそのための地位である）。

それに考えてみる。繰り返すが、コンスタンティウスは四十五歳だ。ユリアヌスと違って、女に不自由する青春を送ったわけでもない。むしろ、宦官は次から次へと女を進めてきた。にもかかわらず、これまで子供がいなくなれば、コンスタンティウス自身の生殖能力に問題があると考える他ない。最愛のエウセビア亡き後、彼女を裏切つて、子作りに励んだところで、上手くいくはずもない。いや万が一、子ができたとして、その子が成人するまで、誰が帝国を支える？ それこそ、ユリアヌスでもなければ、不可能だ。

ならば、最初から、ユリアヌスに帝位を譲れば、話が早い。

——唯一、問題があれば、それはユリアヌスの猜疑や憎悪だ。

ユリアヌスを後継者にし、ユリアヌスに権力を譲った途端、ユリアヌスが猜疑と憎悪の虜とりことなり、コンスタンティウスは殺されるかもしれない。

——だが……ユリアヌスは理性と寛容を重んじると聞く。ならば、無益な殺生は好むまい。親族殺しの件とて、証拠があるわけでもない。それにユリアヌスも既に三十だ。またガリアで為政者の経験も積んだ。ならば、このコンスタンティウスの立場というものもわかるだろう。

「先帝陛下、それは間違いですよ！」

ユリアヌスは思わず叫んでいた。

「このフラウィウス・クラウディウス・ユリアヌスの理性と寛容など、所詮は張りぼてに過ぎません。確たる証拠もない親族殺しを真に受け、猜疑と憎悪の虜となりました。三十年の人生からも、ガリアでの経験からも、何一つ学ばず！ 先帝陛下の立場を、まるでわかろうとしませんでした！」

叫び終えてから、気付く。今の独白を誰かに聞かれたら恥ずかしいどころではない。無職で引きこもりだった頃の癖がまだ治らない。そんな醜聞だけで済めば良いが……。

「………」

しかし、玉座の周囲に人影はなかった。人払いをしたわけでもない。元々ユリアヌスは質素儉約を地で行く。だから、不要不急の官僚は解雇しているのだ。ガリアの田舎ならともかく、コンスタンティノーポリスの宮殿でこれをやると、自然と周囲は閑散となる。

「……もう一つ、問題をあげれば、僕と先帝陛下の政策志向が真逆という事か」

ユリアヌスは自嘲し苦笑しながらも、皇帝としての勅令を再び書き続ける。やっっている事はガリアと同じだ。

不要不急の官僚だけでなく、奢侈遊惰な贅沢も遠ざける。キリスト教徒などへの優遇を改め、税制を簡素にし、庶民への負担を和らげる。質実剛健だった時代への原点回帰だ。そのために

元老院を強化し、多神教徒による自治ネットワークを構築する、これによって、キリスト教徒官僚が抜けた穴を補う。

だが、しかし…

「ガリア程の成果は上がらないかもしれない…」

東方ではキリスト教の力が西方よりも遥かに強いというだけではない。

ユリアヌスとて、己の欠点をわかっている。つまり、自ら現場に出ないと気が済まないのだ。コンスタンティウス達のように後方で踏ん返り返って命令する事ができない。前線の將軍なら、それもいいだろう。だからこそ愛されもする。だが、皇帝としてはどうか？

上司が『自分がやった方が早いし、上手くいくから』と部下に仕事を任せなければ、部下が育つはずもない。とりわけ、組織の規模が大きくなれば、その上司がどれだけ有能であっても、部下なしでは手が回らなくなる。

いや、それでも、基本田舎だったガリアでは上手く行ったのだ。規模も小さかった。地方の中小企業社長なら、自らスパナを振るう姿も尊敬される。実際有能ならば、なおの事。けれど、オリエント皇帝——大都会の大企業の社長がそれではまずい。繰り返すが、自覚がないわけでもない。

次のように指摘もされている。

『ユリアヌスは落ち着きがない子供だ。一個人としても政治家としても、コンスタンティウス達にあつた腰の重さがない。だから、性急に結果を求める。あるいは些細な批判を気にする。政治など、誰がどうやっても、結果が出るまでは時間がかかり、誹謗中傷の餌食になるものだ。幼い頃から、帝王教育を受けていたコンスタンティウス達はそれを十分に理解していた。が、ユリアヌスはその教育を受けていないから…』

正鵠を得ている。実際、この手の分析はユリアヌスに批判的な者達からは少ない。むしろ、サルスティウス達のようにユリアヌスへ必死に協力してくれる者達からの諫言に多い。

——当然だ。これらはすべて僕の長所の裏返しなのだから。

しかし、人間簡単には変われない。成功体験があれば尚の事。そして、経験を重ねる時間も…

いやそれでも、後世の目で見れば——。

ユリアヌスはまだ幸せだったのかもしれない。ユリアヌスの質実を重んじる政策は都会的な東方人には大不評だった（ガリアのような田舎ではやはり好評だった）が、その結果、ローマ帝国は専制に移行して初めて税金を安くする事が出来た。皇帝自らが質素儉約に努めるといふどうしようもない力技で成果を上げられたのだ。商品経済が発達した後世ではまずあり得ない話だったろう。

とはいえ、この時のユリアヌスにそれを知る由もない。黙々と政務に励むのみである。

だが、しばらくして、

「髪が伸びたな」

ぼつりとユリアヌスは呟いた。

今まで忙しさにかまけて切らずに束ねていたが、やはり、仕事の邪魔になる。文化的にも、ガリアでは許された。しかし、ローマや東方では男子の長髪は好まれないだろう。

ユリアヌスは呼び鈴を鳴らす。そして、駆け付けた奴隷に

「髪を切るから、理髪師を呼んでくれ。確か、皇帝専用の理髪師がいたはずだから」

と、端的に告げた、

すると、ぞろぞろと行列を成して男たちが入ってきた。

一瞬、『反乱?』『暗殺?』という単語が脳裏に浮かんだが、どうも様子が違う。

ローマ皇帝暗殺と言えば、親衛隊というのがお約束だ。が、入ってきた連中の風貌はむしろ貴族のそれだった。それも悪い意味での貴族だ。全員が太っており、一見して、兵士としては役に立たないと断定できる。既にユリアヌスは歴戦の勇者だ。この手の眼力には自信がある。

同時に、そんなユリアヌスの命を狙う者が、こんな連中に反乱や暗殺を任せようとは思うまい。いや、もつと言え、

——醜い。

というのがユリアヌスの正直な感想だった

分厚い脂肪が金銀で飾り立てた豪華な衣服をまとっている。

——少なくとも、ガリアやゲルマンにこんな奴はいなかったな。

「ええと、僕は理髪師を呼んだんだよ。徴税官を呼んだわけではないんだけど……」

ちなみにこの時代の徴税官は金持ちの代名詞だった。

「ですから、我らが理髪師です」

「ざつと三十人はいそうなだけで？」

「はい。ちょうど三十人でございます」

「全員理髪師？」

「はい。正確には私の助手を務める者たちです」

「ええと、僕は僕一人の髪を切ってもらいたいだけなんだよ。それもちよつと伸び過ぎたから切ってもらいたいだけだよ。別に髪型にこだわりがあるわけでもない。……なのに、三十人も必要なの？」

「左様でございます」

ユリアヌスは呆れた。髪型にこだわる者がいてもいい。その者が己の稼ぎをつぎ込んで理髪師を何人雇おうとも自由だ。しかし、公金で雇われる身となれば、話は別だ。いや、官僚機構から、無駄を完全に省けるとも思わない。だから、『皇帝専用の理髪師』と聞いた時点で眉を顰めつつも、安全対策の側面もあると考え、納得してきた。

——しかし、三十人は要らないだろう！ まして、理髪師が金銀で己を飾る理由は何だ？！

これが全部血税で養われているのだ。それが君主の楽しみになっていけば、まだ救いがある。しかし、生憎ユリアヌスに（おそらく、先帝コンスタンティウスにも）髪型にこだわる趣味はない。

……要するに、自己保存の原則に従って、官僚機構が肥大化した結果でしかない。

今この瞬間にも、辺境防備の最前線では飢えや寒さに耐えながら、戦っている兵士がいる。彼らのために、どうにか経費を捻出せねばならない。ユリアヌスはそう常々語ってきたの！

ところが、その理髪師は理髪師で、ユリアヌスのみすぼらしい恰好に驚いたらしい。「ユリアヌス陛下は『背教者』と呼ばれる割に、まるでキリスト教の修道士のようなですなあ」

「……演説でも布告でも、僕は繰り返して述べているんだけど」ユリアヌスは軽く嘆いた。実際、断片的にはいえ、現代日本にまで伝わる程、ユリアヌスは同じことを繰り返して述べている。「とはいえ、伝わっていないのなら、もう一度言おう」

ユリアヌスはキリスト教徒に『保護』されて育ったのだから、キリスト教徒に似るのは当然である。とはいえ、信仰を宣言したわけでもない自分をキリスト教徒などと言っては、本物のキリスト教徒に失礼である。また、清貧の美德はキリスト教の専売特許ではない。むしろ、ストア派哲学者ストのような生き方が清貧の由来である。ストア派哲学者でもある皇帝マルクス・アウレリウスの振る舞いを善きキリスト教徒のようだという者もいるが、これは順番が逆だ。善きキリスト教徒がその善性故に、ストア派哲学者の振る舞いを倣ったとみるべきだ。そして、自分もまた善き人間でありたい故、哲人皇帝マルクス・アウレリウスの振る舞いに倣っている。その点で、両者が似てくるのは自然な事ではある。

そして――

「僕はキリスト教徒ではない。それでも、キリスト教徒の説く理想自体は素晴らしいと思う。だから、僕もそれを成し遂げたいと思う。ただし、それはキリスト教徒が語るような、死んだ後に訪れるという来世でない。今、ここで、人が生きている現世で成し遂げたい」

――信仰ではなく、理性で。神の力ではなく、人の手で。

――社会制度というイージスの盾で、科学技術というパルパーの鎌で。

ユリアヌスはゆらりと立ち上がる。

「だから、僕は皇帝権力をそのために使う。……具体的には財政再建が急務であり、『必要な処置』は覚悟しているはずだよな？」

言い知れぬ恐怖に駆られたのだろう。理髪師は怯えながら言った。

「し、失礼ながら、陛下は西方の野蛮人に毒されたのでは……？　せ、先帝陛下ならば……」

「黙れっ！」

クノドマルをはじめとする『野蛮人』は確かに敵だった。しかし、彼らもまた生きるために戦っていたに過ぎない。そして、あの老将は同胞のために身を投げ出した。それをこんな男に

とやかく言われる筋合いはない。

ましてや、先帝コンスタンティウス二世陛下については……！

いずれにせよ、今のユリアヌスは気弱な学者志望の少年ではない。

血風と汚泥の中をはいずりまわってきた故の狂気を内に宿している。

「陛下、こちらで切り捨てましょうか？」

トゥルートの冷たい声が、熱くなった耳に届いた。

「……いや、いい。自分でやる」

ユリアヌスは佩いていた剣を手に取り、その刃で己の後ろ髪を切り捨てる。

「これで用件は済んだ」

理髪師は零囲気の急転に目を白黒させていたが、とりあえず一息をついた。

だが、ユリアヌスが告げる。

「なお、理髪師諸君の給料は来月から三十分の一にする。単純計算で残り二十九人は解雇だ。今から、再就職先を探しておくように」

「なっ」

「以上だ。勅命である。下がれ」

理髪師たちは一瞬反発を顔に出したものの、目の前の皇帝が今や戦場育ちも同然という事を思い出したらしい。逃げるかのようにその場を立ち去った。

結果、ユリアヌスはトゥルートと二人きりになる。

「まさか、君に止められる日が来るとはね」

苦悩と疲労で自制が危なくなっている。ユリアヌスも認めざるをえず、頭を抱えた。

トゥルートは黙って傍に付き添ってくれる。

だが、数分の後、気付いた。

「あれ、交代の時間まではまだ余裕があるのにどうして？」

「いや、酔っ払った阿婆あば擦れ女ずれから逃げて来て……」

「はあ？」

ユリアヌスは首を傾げた。

「いいから、気にするな！」

トゥルートは何故か顔を真っ赤にして怒鳴る。

「わかったよ」ユリアヌスにはこういう顔のトゥルートへ逆らえた例ためしがない。「それで、あの理髪師達はどうする？」

「どうするって？」

「解雇クビにされて僕を恨んでいるだろう。ここは後顧の憂いを断つために、馘首クビにすべき——と



感覚としてはコロニア奪還の時に似ている。敵の兵数も戦意も乏しく、あっさりと勝てる。ただし、『勝たせてもらっている』気配が濃厚でもある。

違うのは領土経営の意識がないゲルマンと違い、ササン朝ペルシャ帝国はそれこそローマと同じ【帝国】であるという点だ。そして、どう言い繕うとも、今のペルシャはその領土を失いつつある。なのに何故本気で抵抗しないのか？

道案内役のシャハラザードはその答えを簡潔にまとめた。

「ペルシャ皇帝シャーブル二世は、ユリアヌス様の実力を調べ上げているのでしよう。それ故に、まともにやり合っても勝ち目がないと判断しているのかと」

「やっぱり、焦土作戦か……」

それは文字通り、意図的に領土を焦土にする作戦だ。畑を焼き、井戸を埋め、敵軍が領土を占領しても、麦一粒水一滴も得られないようにする作戦である。

「僕はさしずめハンニバル・バルカ？」

頑強で粗食に耐え、勇敢で智謀に富み、金銀で己を飾らない点でユリアヌスはハンニバルに近い。そんなもので威厳を演出せずとも、常勝という結果に、兵達が服従するからだ。

「それともガイウス・ユリウス・カエサルかい？」

西方のガリアで基盤を固めた点ではカエサルに近い。実際、ユリアヌスがガリアで発掘した人材——皮肉にも野蛮人と呼ばれたゲルマンこそが、この後、ローマ帝国を支える事になる。

しかし、シャハラザードは首を振った。

「いえ、アレクサンドロス大王です。もつとも、ハンニバルもカエサルもアレクサンドロスに憧れていたようですがね」

先にあげた三者も皆揃って、名将である。名将であるが故に、敵する側はまともに戦いたくない。だから、焦土作戦に苦しみられた。まさしく今のユリアヌスと同じだ。もはや、歴史の必然と言うべきだろう。

「あー、僕もアレクサンドロスには憧れるよー。……もつとも世間の評価は逆だけどねー」

この頃、ユリアヌスは専制的な東方においても、民主的な西方の振る舞いを捨てない事で、現地住民からは侮られていた。アレクサンドロスが専制的な東方の振る舞いに馴染んだ事で、民主的な西方を忘れられない古参臣下に疎んじられたのと、ちょうど逆である。

（何故、ヨーロッパにおいては東方が専制的で西方が民主的かというところ——あるいはアジアにおいては西方が専制的で東方が民主的かというところ——ユーラシア中央に陣取る遊牧騎馬民族Ⅱ過去のスキタイ、将来のモンゴル、そして、この時代の『神の鞭』の影響と思われるが……）  
ユリアヌスは頭を振った。

「いや、話を戦略に集中させようか」

戦略が似てくるのは当たり前だ。後発組は必ず偉大な先駆者を模倣しようとするものだから。それにペルシャの様な大国を攻めるには大軍が必要になる。その戦略も収斂せざるを得ない。

——そして、それを防衛する側のペルシャが取る戦略も収斂していくわけだ。

現在ユリアヌスが率いる総兵力は約五万人——古代世界で遠征可能な限界規模である。通信技術の問題から、これ以上、兵士が増えると命令伝達に支障をきたす。第一、補給が持たない。五万人の食料を用意する事自体が難しい。おまけに戦力集中の原則から、分散させる事が出来ない。後世と違い、輸送技術も未熟だ。だから、遠隔地から食料を取り寄せることも難しい。セノネス防衛の時にも述べたが、こうなると軍隊は周辺一帯の食料備蓄を食らい尽してしまう。

「ふっ、僕はさしずめ≪滅びの蝗を率いる墮天使≫といったところか」

「……話を戦略に集中しましょうね。ユリアヌス様も三十路過ぎなんですから」

シャハラザードがジト目で睨んできた。こういう容赦のなさは年々トゥルートに似てくる。「兵達の不満はわかるよ。五万で敵地を行軍するには敵軍と戦って食料を奪うしかない。なのに、その敵軍が戦ってくれない。おかげで補給が滞りつつある。……こんなところまで連れて来た。僕に槍を投げ付けてやりたいと考えている者もいるかもね」

「その割に、あっけらかんとしていつらしゃる気が……」

「内心ビクビクだよ。でも、僕が不安を見せても問題は解決しない。かえって、兵達に恐れが伝わってしまうだけだ」

結局、ユリアヌスは己を律するしかない。一兵士と同じく乏しい水と食料に耐えつつ、泰然自若を取り繕うしかない。

「それに辛いのは、ペルシャ皇帝シャープール二世も同じだよ」

「そうでしょうか？」

「うん。たしかにペルシャ軍は典型的で理想的な焦土作戦を遂行している。ペルシャの地力と錬度、そして、シャープール二世の指導の適切さを示している」

ユリアヌスが内心ビクビクと言ったのは嘘ではない。連戦連捷というのもあくまで正規戦に限っての話だ。敵が奇襲や夜襲で食料物資を燃やし、こちらが反撃に出ようとするとさっさと逃げていく——という事は何度もあった。犠牲者の数は皆無に近いものの、この手の遊撃戦にローマ軍はなす術もない。

「けれど、結局、僕らは行軍を継続している。士気も低下はしているけど崩壊はしていない。そもそも焦土作戦を選択した時点で、守るべき自国の民の生活を破壊してしまう」

ローマもかつて焦土作戦を決行した事がある。しかし、貴族主導で実行され、成果も上げたその焦土作戦に平民は最後まで反対した。理由は色々語られているが、本質は一つだろう——誰であろうと、必死に耕した田畑を自ら焦土にはしたくない。まして、貴族と違い、平民には蓄えが乏しい。焦土作戦で敵軍が自滅するよりも先に、自分が飢え死にするかもしれないからだ。

「そう。焦土作戦は成功しても、民に負担をかける。ペルシャ皇帝が辛くないはずがない」  
ユリアヌスは断言するが、シャハラザードは冷笑を返す。

「いえ、彼は、少なくともその点については、痛痒に感じていないでしょう」  
「何故？」

「ペルシャ皇帝シャープール二世は【専制君主】ですから」

「君は……？」

ユリアヌスはそれ以上問いかける事が出来なかった。

「皇帝陛下っ」

という大声と共にトゥルートが駆け寄ってきたからだ。

「敵です！ それもこれまでとは桁が違う！」

ユリアヌスは拳を握った。

焦土作戦の主旨からすれば、ペルシャ軍はローマ軍の前に立つべきではない。

にもかかわらず、ペルシャ軍はこのこ出てきた。それもトゥルートによれば——つまり、  
ほぼ間違いなくペルシャ軍は大軍らしい。

と、なれば、合戦どころか会戦になる。ローマが望み、ペルシャが嫌がっていた展開だ。

シャープール二世の指導力から考えて、配下の独断などではありえない。ペルシャ軍にそう  
せざるを得ない理由がある。

すなわち、ユリアヌスは遂にペルシャ帝国首都クテシフォンへ肉薄したのだ。

「さすがに首都を焦土とするわけにはいかない。政治的経済的にペルシャが成り立たなくなる。  
だから、軍事的には好ましくない選択であろうとも、ここだけは必ず防衛しなければいけない  
——といったところだね」

敵兵の数は今のローマ軍の約二倍——予測通りだった。シャープール二世側もユリアヌスと  
似た事情から、これ以上の兵数を揃える事は出来なかったらしい。

勿論、だからといって、対等の条件ではない。二倍の敵数というだけで普通は負ける。その  
上、ローマ軍は遠征で、ペルシャ軍は地元である。どう考えても、ペルシャが圧倒的に有利だ。  
しかも、これまでの焦土作戦の効果で、ローマ軍の疲労と空腹は甚だしいものになっている。  
純粋な戦闘力ではローマ軍が上だろう（故にこそ、これまで向こうは決戦を避けてきたの  
だ）が、ペルシャ軍が積み重ねてきた勝利への布石を覆す程のものではない。

逆転の要素と言えば、ユリアヌスの用兵力のみだったが……。

——勝てる。行けるぞ。

と、ユリアヌスには自信があった。大局的には劣勢だが、かえって頭は冴えている。今なら、  
ダレイオス三世率いる百万の兵を打ち破って、インドにまでも進撃できそうだった。  
その時、トゥルートが声を上げる。

「何だあれ？」

彼女の視線の先は敵陣にあり……

そこには巨大な獣が並んでいた。

「あれは『象』……かな？」

「はい。あれが象です」シャハラザードが歯ざしりをしていた。「かつてスーサという街でも、用いられました」

「スーサ？」

「今は【シャール・ブルが建てたイランの栄光】とも呼ばれている街です。十数年前、その街で反乱がおきた時、シャール二世はあの象で街そのものを踏み潰したのです」

「……苛烈だね。住民は皆殺しか……」

痛ましい。本当はそう思っていた。とはいえ、今のユリアヌスは侵略者だ。そんな事を口にする資格はあるまい。

「いえ、小娘が一人生き残りました」

「……？」

「小娘は無力でしたから、シャールに媚を売りました。小娘の親は反乱とは関係なかった。ただ、同じ街に住んでいたというだけで殺された。そんな親の仇に諂へつらったのです」

「それって……」

「……その後、ローマ人捕虜のために街が再建されたので、その小娘はローマ人の中で育ち、ローマの言語風習に精通するようになりました。おかげで情報機関に雇われ、西方に赴き……すみません。関係のない話でしたね」

そう言って、シャハラザードは目頭を押さえる。

ユリアヌスは思わず手を差し伸べようとするが……、

「指揮に集中しろ」トゥルートの言葉がその手を止める。「その娘にも誇りがある。ましてや、そいつは忠臣だ。主君を惑わせたとあれば、自責を募らせ、自害とてしかねんぞ」

シャハラザードは必死にこくこくと頷いていた。どうやら感情が昂ぶり、まともに話せないようだ。だから、首を振って、トゥルートの代弁に賛同する。

「……う、うん」

ユリアヌスも皇帝インペラトルの顔を作り、腹の底から声を出す。

「戦友諸君よ。見たまえ、ペルシャ帝国は象まで持ち出してきた。たしかに戦場では珍しい。しかし、サーカスではお馴染みだね」

兵士達がどっと噴き出す。

「所詮は獣だ。調教して芸をさせる事すら出来る。ならば、軍隊が殺せぬ道理はない。いつも通りだ。君らはローマの兵士で、僕はローマの皇帝だ。いつも通りに勝利しよう」

——開戦前に何頭か仕入れて、兵士達に象殺しの経験を積ませるべきだったかな？  
ユリアヌスは演説とは裏腹に少し悔やんでもいた。

とはいえ、この点は完全に杞憂だった。

象を揃える事による心理的効果はたしかに大きい。だが、歴戦のローマ兵士はそこまで繊細ではなかった。冷静に矢を射かけ、後方に回り込み、槍を突き刺して、あっさりとは仕留める。そも、象の飼育費用は馬をも遙かに上回るので、大量の運用は不可能だ。だから、整備された軍隊が落ち着いて対処すれば、意外と簡単に殺せるのである。

むしろ、自軍の二倍の敵兵というのが単純に殺せるのであった。

いや勿論、普通はきついなんて次元ではない。

しかし、ユリアヌスにはアルゲントラトゥムでも見せた用兵力がある。さすがにペルシャはゲルマンよりは組織的に動いてくる。しかし、ローマ軍には及ばない。何より、シャープール二世にユリアヌスのような異常な戦術眼はない。

ペルシャからすれば、まるで魔法だったかもしれない。ペルシャ軍の総数はローマ軍の倍だ。なのに、現場に出ると必ず自分達よりも多くのローマ兵から集中攻撃を受ける。

いや、味方のローマ兵も不思議がっているようだった。遠目には二倍の敵がいるのに、いざ槍を交わす段になると、何故か敵数はこちらを下回っている。

——これなら勝てる。

と、確信できるし、現実に勝利を重ねる事も出来る。

セントゥリオ  
百人長辺りにはこれがユリアヌスの実力だと理解できるだろう。戦場規模で敵軍を分散させ、各個撃破に持ち込んでいるのだ。焦土作戦によって蓄積していた不満も自然と和らぐ。あの

イヌストラトル  
【皇帝】にどれほどの欠点があるうが、いざ戦争になれば、あの小男ほど、頼りになる奴はいないのだ——と。

「うん。戦機が熟してきたね」

ユリアヌスは指を一本ずつ伸ばす。

「一、二、三……はい。突撃」

もはや、大声すら必要ない。ユリアヌスの手の動きに合わせ、ローマ兵達は迷わず突撃する。対するペルシャ兵は一目散に逃げ出す。こうなるとペルシャ側の将校にも打つ手がない。

「よし。勝利確定」

ユリアヌスの子供っぽい自嘲癖にもツツコミはない。むしろ、尊敬の視線すら集まっていた。「ペルシャ軍の錬度は決して低くない。逆に、こちらはアラブ人のような現地協力者も兵数に入れてる。なのに……」

トリクリニウム  
「食堂と同じさ」ユリアヌスはいい質問だと思ったので答えた。自分も既に三十、次世代を

考える時期でもある。「上に立つ者の役目とは、獲物の肉を切り別ける事だ。それぞれが食べ易い大きさに、きちんと切り別けられてさえいれば、下の者は一口で飲み込める」

しばらくして、報告が来る。

「敵するペルシャ軍の死者二万五千人！ 対する我がローマ軍の死者七十五人です！」

——嘘をつくな。嘘を。

ユリアヌスは溜め息をついた。いくらなんでも戦死者の比率が二万五千対七十五——後世で言うキルレシオが約333対1なんて訳がない。

ただ、その位の大勝だったというのは事実だ。

実際、報告した者の顔にも明らかな喜色がある。

「……あとで正確な数字をまとめて持って来るように」

「はっ！」

わかっているのかいないのか……怪しくなる返事の直後、ユリアヌスは目眩がした。

顔には出さなかったつもりだが、トゥールトにはバレたらしい。彼女はさっと駆け寄って、ユリアヌスの身体を支えてくれた。

「……トゥールト、このまま少し仮眠をとる。状況に変化があれば……」

「ああ、わかったから、休め」

ユリアヌスは馬上で筆頭衛士に支えられながら、両目を閉じた。そういえば、ここ一週間、まともに寝ていない。昼間にこうやって軍事行動をしている以上、皇帝としての政務は夜中にやらざるを得ないからだ。食事が一兵卒と同じなもの、本当は単に食欲がないだけだったりもする。

——でも、これで対ペルシャ戦争の終わりが見えてきた。

とはいえ、この調子だと、いざれ過労でとんでもない失敗をやってしまいそうだ。

——あ、そうだ。サルステイウスの権限を拡大し、西方全域を管轄してもらおうか？ いや、いつそ共同皇帝になってもらおう。老体に鞭打つようだが、国家のためだ。嫌とは言うまい。純粋な行政官としての能力は僕をはるかに上回る。市民も納得するだろう。

サルステイウスに西側の統治を丸投げすれば、ユリアヌスの負担と疲労は大分和らぐ。また、ユリアヌス一人では内政が東側に偏る問題も解決する。

——けど、国家再建に十年、後継者育成に十年として……僕が皇帝業務から解放されるのは五十を過ぎてからか……。いや、哲学者としては遅過ぎるわけではないけど。

ユリアヌスがそうして夢想にまどろんでいると周囲がざわめき出した。

戦闘自体もまだ散発的に続いている。だが、大勢は既に残敵掃討に入っているはず。

では何事かと耳を澄ましていると、どうやら、ペルシャ側から、非公式な講和の使者が来たらしい。

——まあ、あれだけ、大負けすればなあ。

ユリアヌスは瞑目したまま、黙考し、端的に告げる。

「駄目。講和したいなら、公式に使者を寄こして」

「ユリアヌス陛下！ お考え直しを！」その使者は強引にユリアヌスの前へ割り込んできた。

「シャープル陛下にも名誉があります！ 公式な使者など、送れるはずがありませんまい！」

「君の忠義に敬意を」ユリアヌスはシャープル二世に尊敬と嫉妬の念を抱いた。笑いながら、目を開く。「故に本音を告げよう。どうか、ペルシャ皇帝シャープル陛下へお伝え願いたい。いかにローマ帝国といえど、この規模の遠征は二度も三度もできない。僕もローマ皇帝として、勝利を確定させる義務がある。シャープル陛下のペルシャ統治権は保障する。……というか、生きてペルシャを治めてもらわないと困る。国境線を安定させてもらわねばならないからね。だから、頼む。公式に講和して欲しい」

「……シャープル陛下の権利は保障してもらえますね？」

「ああ。ペルシャの民を安んじてくれれば、それでいい」

「シャープル陛下は民を安んじております！」使者は思わず大声をあげた。「あ……、いえ、ユリアヌス陛下のやり方とはいささか違うかもしれませんが……東方には東方のやり方というものがありました……」

「そうだろうね」

ユリアヌスも認めざるを得なかった。この対ペルシャ戦の前に、外交的な努力をしなかったわけでもない。ペルシャからの亡命皇子オルミスタを使い、ペルシャ帝国の内部に揺さぶりをかけてもみた。が、結果はほとんど効果がなく、結局は軍事的に侵攻せざるを得なかった。

つまり、ペルシャ帝国はそれなりに上手く治まっているのだ。完璧な統治には程遠く、国家権力による犠牲者も多いが、ユリアヌスにそれを指摘する資格はない。

ふと、シャハラザードが【専制君主】を憎む理由がわかった気がした。街一つを踏み潰し、住まう民を皆殺しにしてもなお、統治の上で必要なら、許容される。それは国家というものが巨大になれば、不可避の現象なのかもしれない。百人の村ならば、その内の一人を罰せば済む話も、万人の国ならば、村一つとも言える百人を罰せねばならない話になるからだ。

そして、シャープル二世は胎児の頃から、ペルシャ皇帝として君臨し、齢六十を超えた今なお君臨し——スーサのような街があれば、やはり罰しているという。

——それは最早、民の代表者ではなく、ヒトの超越者だろう。少なくとも、その精神構造は既に一個の人間ではなく、天上に住まう者だ。

シャハラザードにはそれが許せなかったのだろう。

「だから、【シャープリン・フワル・シャープルの栄光】の名をスーサに戻して欲しい。僕の望みはその程度だよ」

\*\*\*

「ごめんなさい。ごめんなさい。わたしのために、こんなわたしのために……！」  
シャハラザードがぼろぼろと泣いた。

今思えば、シャハラザードはクレオパトラ気取りだったのだろう。ユリアヌスを影から操り、自身の復讐を代行させる気だったのだ。後世で言うキングメーカー志望というところか。ただ、シャハラザードはクレオパトラを気取っていただけだ。ユリアヌスの目から見ても、彼女は根が真面目だ。忠誠を偽る事などできない。主君に道を誤らせたと思えば、己を責めること甚だしく、酒に溺れすらする娘だった。

トゥルートが耳元で囁く。

「おい、ユリアヌス、今夜にでも、あの女を抱いてやれ」

「はあ？」

「女なんてな、ワンワン泣き喚いていようが、ヤッてしまえば、機嫌を直すもんなだよ」

「いや……それは偏見では？」

「お前が女を知らないだけだ」トゥルートは断言する。「特にあいつは生娘だ。ヤッてしまえば、すぐ大人しくなるさ」

「ええっ。たしか『このへたくそ』とか言われて、ぼこぼこに殴られた気が……ぐはあ」

トゥルートが見えない角度で腹を小突き、ユリアヌスの台詞を中断させた。

「いいか。あたしはどうせ交代時間だ。あっちに行っているから、よろしくやっておけよ」

そして、トゥルートはユリアヌスから離れ出す。その後ろ姿はなるほどカッコいい。

ユリアヌスは呟く。

「……あれはモテるわけだ」

——でも、僕が君と違つて、女性に不慣れだつて事忘れていない？」

よろしくやれと言われても、ユリアヌスにはよくわからない。

そして、その次の瞬間だ。

突如、トゥルートは振り返り、叫ぶ。

「ユリアヌス、避けるっ！」

「えっ？」

ユリアヌスの腕は反射的にシャハラザードを押しつける。

歴史を変える一本の槍が飛来する。

それは放ち手もわからぬ『流れ槍』とでも言うべき擲槍だった。

だが、だからこそ、予測も回避も困難だった。

槍はユリアヌスの脇腹に刺さった。



——だけど、意気地無しはこの僕が、こうも淡々と己の死に臨めるとはな……。あるいは戦場で活躍できた事以上に不可思議だった。

——いや、毎度の如く、単に現実感がないだけか？

思わず笑みがこぼれる。結局、この一生は夢物語のようなものかもしれない。

「では、最後の望みだ」

ユリアヌスはトゥルートに向かつて言った。

「僕は哲学者として死にたい。……頼むよ。僕は皇帝になんかなりなくなかったんだからさ」

そして、ユリアヌスは軍人を退け、靈魂の不滅を論じつつ、穏やかに死を受け容れた。

時に西暦三六三年六月二六日。

享年三十二歳。

\*\*\*

次期皇帝はヨウイアヌスという例のローマ将校に決まった。

ヨウイアヌスの前評判はあまり良くなかったが、少なくとも自分の役割はわかっていたらしい。すみやかにペルシャに使者を送り、シャープール二世に平身低頭で講和をまとめた。ローマ側が圧倒的に譲歩する講和条件で、事実上の条件付き降伏だったが、状況からすれば、やむをえまい。ユリアヌスならこの決断を支持するだろうと、トゥルートは思った。

ただ、

——ユリアヌスの遺体はキリキア州タルソス市に葬られる。

と聞いた時には眉を顰めた。

ヨウイアヌスと言う。

「ローマ皇帝に相応しく、キュドヌス河の堤に壮大な墓標を打ち立てる事にしましょう」

「……それがユリアヌス陛下の御心に沿う事か？」トゥルートはつい訊ねてしまった。

「いいえ。ユリアヌス様なら、壮大な墓標など、虚飾と浪費の象徴と激怒されるでしょうな」彼はあっさり認めた。「実際、ユリアヌス様の論敵であったリバナウス殿も、アカデメアの森にひっそりと葬られるのが質実を重んじた故人の遺志に沿うと嘆いておられました。また、ガリア以来の戦友も、遺灰は古代ローマの武威を記念する奥城群おくつきに加えられるのが武人だった故人に相応しいと憤っておられました」

「だったら何故？」

「しかし、それが皇帝の義務です」

「義務？」

「紫衣の話を御存知ですか？」

「ああ」

その話はトゥルースも知っている。というか、事の顛末を間近で見ている。

ユリアヌスがコンスタンティウスの後を継いだ頃、コンスタンティウスの遺産を相続した。その中には、コンスタンティウスが丹精込めて育て上げた諜報網もある。ユリアヌスも当初はこれに期待した。が、上がってくる報告には失望も多かった。

どこそこの大商人が服飾店に紫の衣を注文した——そんな報告がその諜報網から、上がってきたのだ。トゥルースには意味がわからなかったが、ユリアヌスにはわかったらしい。ローマ帝国において、紫は高貴な色とされ、皇帝が用いる事になっていたのだ。たしかに紫は染色が難しいため、高貴と言えなくもない。ユリアヌス自身も副帝から正帝になった時、外套の色を赤から紫に変えている。そんな紫色の衣を注文したという事はその商人には玉座を狙う野心があるかもしれない……という理屈らしい。

ユリアヌスはその報告を聞き、大きく溜め息をついた。先帝コンスタンティウス二世は似た報告があがってくる度、そういった『野心があるかもしれない』輩を反逆罪で殺していたのだ。コンスタンティウス二世の警戒心が行き過ぎ、疑心暗鬼となっていた一例である。念のため、ユリアヌスはその商人が私兵や武器を集めているかを調べたが、当然そんな形跡はなく、紫の衣は単なる趣味の問題とはつきりした。

——「紫の服には紫の靴が似合うだろう」  
いい機会だと考えたのだろう。ユリアヌスはその商人へ紫の靴を送った。そして、

と、喧伝したのだ。密告や専制からの決別を明らかにしたのである。

——「皇帝に求められるのは民を安んじる能力があるか否かだ。服の色などどうでもいい」  
これを評して、ヨウリアヌスは言う。

「ユリアヌス陛下のような天才ならばこそその逸話です。私のような凡愚にはまねできません」  
天才——生前のユリアヌスを近くで見えてきた身には反発を抱く言葉である。だが、たしかにそれはユリアヌスの一面でもあった。

「ユリアヌス陛下は『能力』と仰いました。なるほど、ユリアヌス陛下はそれをお持ちでした。私などは仕えて日が浅いですが、クテシフォン会戦を見ただけでわかります。偉大な方です。ゲルマンが自ら膝を折るのも無理はない。かつてコンスタンティウス陛下はユリアヌス陛下の武威に嫉妬していたと噂された事がありますが……いや、実際、理性によって統御されていただけで、嫉妬していたと思いますよ。いくら、お二人の皇帝としての性質が真逆といっても、男子ならば、誰もがユリアヌス様のように戦場を駆けてみたいと夢想するものですから」  
女だってそうさ——とトゥルースは思った。

当人の望みに反し、ユリアヌスが哲学者として評価される事はないだろう。政治家としても功罪相半ばと言われかねない。万人が納得するのはその軍事的才能だけだ。

逆に、理想を胸に戦場を駆けるその姿だけは、誰もが憧れるものだった。

「けれども、それはあくまで夢想です。そんな『能力』は万人に具わるものではありません。この世界に住まう大多数は至弱いじよわき者ですから」

そして、ヨウイアヌスは自分もまたその至弱いじよわき者の一人だと言う。

「だから、私はユリアヌス陛下ではなく、コンスタンティウス陛下のような皇帝を目指します。ああ、親族を粛清するという意味ではありませんよ。そんな事したくありません。おそらく、コンスタンティウス陛下もそうであつたように。これは無能を権威で誤魔化すという意味です。宦官も多用するかもしれません。そうして、臣下と距離を置き、畏怖の対象を目指します」

「……東方オリエントの専制君主のように？」

「はい。能力で判断されては、皇帝の首が幾つあつても足りません。実際、無能とみなされた皇帝が次々と殺された軍人皇帝時代は、結局政権が安定せず、混乱をもたらしただけでした。コンスタンティウス陛下たちが、個人の才覚に依存する能力ではなく、張りぼてでも機能する権威を以つて、皇帝の証としてきたのは、私にはとても賢明に思えます」

「……キリスト教も奨励するの？」

「ええ。キリスト教は素晴らしい。貧しい者の心の慰めであると共に、権力者を無条件で肯定する舞台装置ですからね」

ヨウイアヌスのキリスト教認識は衝撃だった。

彼によると、それは貧しい者を貧しいまま、満足させておくための宗教なのだという。

これはユリアヌスの（そして、彼に感化されたトゥルートの）認識とはかなりずれている。ユリアヌスは何だかんだでキリスト教を評価していた。とりわけ彼らが発明した《人類愛》を絶賛していた。この《人類愛》とは後世に濫用される空虚な精神論ではない。ガリアで教会が貧民にパンを配っていたような現実の行動である。よそ者であっても、助けを求めていけば、救いの手を伸ばすべき——という具体的な相互扶助である。だから、ユリアヌスは現代にまで残る手紙で『多神教徒もこの《人類愛》を学ぶべき』と記している。そして、彼の理念はこの《人類愛》はキリスト教徒の占有ではなく、あくまでも社会制度の一環であるべきというものだった。

——しかし、それなら、キリスト教そのものを利用すればいいではないか？

と西方にいた頃は思わなくてもなかった。実際、コンスタンティウス達も同じ事を考えて、キリスト教を優遇したのだ。この質問に対し、西方にいた頃のユリアヌスは言葉を濁しただけだった。が、キリスト教の盛んな東方に来て、その実態を見れば、その意味もわかる。

——キリスト教徒の語る《人類愛》とはキリスト教徒だけのものなのかもしれない。

と思わせる場面に何度も出会ったからだ。トゥルートのキリスト教徒ではない。では、何を信仰しているかと言われれば怪しいが、怪しい時点でキリスト教徒の言う『異教徒』らしい。

そして、キリスト教徒にとっての『人類』とはキリスト教徒のみを指し、異教徒は人類ではないと考えているのかもしれない。たとえ、同じローマ市民であっても。

…だから、キリスト教徒が異教徒バガヌスの村で、嬉々として略奪や虐殺をしている場面も珍しくなかった。報告を受け、駆け付けると、その足元には輪姦されて屍となった幼い少女の姿すらあった。

故郷のコローニアを髣髴とさせる光景だった。だが、その時のトゥルートの一介の少女ではない。仮にも現役皇帝の筆頭衛士だ。個人的武勇だけではない。社会的地位も、兵士に命令を下す権限も備えている。そんなトゥルートを前に、そのキリスト教徒は脅える事も逃げる事もなかった。何故か？

『先帝コンスタンティウスたちがこれを黙認してきたからだ』

という事情を聞いた時、ローマ帝国に対する信頼が一気に崩れかかった。

『異教徒は邪教徒である。故に滅ぼす事は善行なのだ』

という理屈を聞いた時、キリスト教徒に対する嫌悪が一気に膨れ上がった。

勿論、トゥルートの【主】ドミヌスはそんな輩を認める男ではない。

——「ナザレのイエスは、神の教えに背いても、石で撃たれる娼婦を庇ったんだぞ！」

ユリアヌスは激怒して、即座に罪人の首を刎ねた。そして涙する若き皇帝を見たユダヤ人の一人などは

——「背教者ユリアヌスこそ、真の救世主ではないか？」

と、かつてのシャハラザードと同じ結論に辿り着いた程だ。

ユリアヌスがキリスト教を信仰できなくなった理由もおおよそ察する事が出来た。これではユリアヌスがキリスト教から、《人類愛》のみを取り出し、それ以外を放棄したくなったのも、無理はない。

逆に言えば、これ程の想いをしてもお、キリスト教徒の語る《人類愛》には価値がある。

そう、ユリアヌスは——いや、あるいはコンスタンティウス達も——考えていたのだ。

だが、ヨウイアヌスによると、キリスト教はこれからその美德すらかなぐり捨てるといふ。

さらに、ローマ帝国はそんなキリスト教と一体化するという。

「既にローマは老いさばらえたのです。『パンとサーカス』のような社会福祉制度を通じた《人類愛》を実現する力は失われました。だからこそ、『神の国』に代表される来世の希望に縋るしかないでしょう」

「来世だと？」 トゥルートは呆れた。同時に空恐ろしさに震えた。それは光り輝く太陽の下を自由に歩く古代が失われ、暗黒の中世が忍び寄る気配そのものだった。「つまり、現実の苦難に立ち向かう能力はもうないのだから、幻想の希望に溺れていればいいと？」

「ユリアヌス様には現実の苦難に立ち向かう能力がありました。これは断言できます。まさにあの方こそ、最後の希望でした。ローマがやり直す、最期の機会でした。しかし、それも今や失われたのです」

「それでは……ローマは……」

「まずまず、衰退するでしような。はい。私もそう思います」

ヨウイアヌスは否定しなかった。ただ、諦観を指し示すのみだった。

それは老いていく文明の姿そのものに思えた。破局に抗う気力そのものを失っている。神の裁きと言われれば、己の一人子ひとりごさえも、生贄に捧げるだろう。

——《黄昏ラッナロクの時代》。

今は遠いトゥルートの故郷の言葉が嫌でも思い起こされる。

「……酒と女に溺れる放蕩児と聞いていたが、随分と明晰な論理を組み立てるものだ」

「あなたこそ、武勇だけが取り柄の蛮族と聞いていましたが、それだけではありませんねえ。あるいはこれがユリアヌス陛下の薰陶ですか？」

ああ、そうだ——と彼はそこで手を打った。

「あなたが皇帝になるという選択肢もありますね？」

まだ、私の即位は暫定的なものですし——と彼は気楽に言っただけ。

「なっ、何を馬鹿な……！」

「ゲルマンだから？ 人種差別はよくありません。多民族国家であるローマの精神に反します」

「いや、そうではなく……！」

「それとも、あなたが女だからですか？」

「……！」

「いいんじゃないですか？ こちらで一発《女帝アウクスタ》というのも悪くない。しかも見目麗しく、凄まじい槍使いの美人皇帝です。頭の固い元老院はともかく、兵士や大衆には受けまますよ」

トゥルートは目を逸らす。

「あたしは……ユリアヌスのようにやる自信がない」

「だから、言っているでしょう！ 私だって、あの人みたいになんてできないですよ！」

ヨウイアヌスは絶叫した。それがこの男が初めて見せた本性だった。

「何故、我々が撤退しているか、お分かりですか？」

「それはユリアヌスが投げ槍で……」

「そうです。皇帝という名の、たかだか一人の人間が死んだからです。その一人に全てを委ねていたからです。皆、あの方に縋りつくばかりだったからです。違いますか？」

「……」

トゥルートには返す言葉がない。

「……失礼」ヨウイアヌスはそこで息を整える。「とどのつまり、これが君主制の限界ですよ。独裁者も皇帝も所詮はただの人間なのです。ただの人間にそこまで期待している時点で、もう終わっているのです」

だから、時勢には逆らえない。逆らわない——それがこの新皇帝の意思らしい。

「そうか……だが、あたしは沈む船に乗り続ける趣味はない」  
トゥルートのローマ軍を去る決意をした。

\*\*\*

荷物をまとめていると、背中に気配を感じた。

「シャハラザードか？」

「……御明察」

物陰から、シャハラザードが現れる。

「身を隠していた理由は……聞くまでもないな」

交代時間だったトゥルートにすら、筆頭衛士としての責任を問う声がある（ローマ軍を去る事にも追放処分の意味がある）。ユリアヌスが最期に庇ったシャハラザードなら、尚の事だ。

その上、シャハラザードはペルシャ人として、遠征中は道案内を務めていた。焦土作戦に苦しめられたのも、単独皇帝に槍が当たったのも、このペルシャ人が敵に内通していたからでは？

——という陰謀論は実しやかに囁かれている。

それがわかっているのだろう。シャハラザードが悲しい目で訊ねる。

「あなたは疑わないの？」

「……あの【擲槍】にそんな【意思】は込められていなかったよ」

トゥルートは断定する。もし、投げ手に殺意があれば、トゥルートはそれを読み取り、防ぐ事ができた。……できなかったという事は、少なくとも殺意はなかったという事だ。

「それ……本当なの？」

「くだい。あたしは槍女神ゲイルスケゲルの末娘、槍乙女ゲルトルートだぞ？」

だから、間違いない。己の存在意義を誤るはずがない。

しかし、この単純明快な理屈に、何故かシャハラザードには苦笑いする。

「いや、その理屈、正直さっぱりなんだけど……ま、あなたの人外じみた槍働きを考えれば、信用するしかないのかな……」

「疑っていたのか？」

「……だから、調べていた」

「結果は？」

「【背教者ユリアヌス】は唯一絶対なる《神》への反逆故に、天使が放った槍に貫かれました。

哀れなる悪魔の化身ユリアヌスはその死際にこう呟いたそうです。『ガリラヤ人（キリスト）よ、汝は勝てり』と」

「下らん。まるでユリアヌスが書いていた同人誌だ」

そんな迷信が蔓延るのではローマ帝国も終わりだ。ヨウイアヌスの諦観も無理なからぬ話か。

「わたしは深読みした。キリスト教徒による《背教者》暗殺計画があつたんじゃないかって。焦土作戦で兵士の不満もたまつていたし……」

「だが、お前でも裏付けは取れなかったんだろう？」

「……………」

「……サルステイウスの親父オヤジを連れて来なかつた時点で、遅かれ速かれこうなつていたさ」

この時期、サルステイウスは遙か西方のガリアを治めている。おかげでトゥルートの故郷は安全安泰だが、ユリアヌスの負担は凄まじい事になっていた。あの槍がなくとも過労死していてもおかしくはなかつた。それがわかつていたのだろう。サルステイウスはわざわざガリアからペルシャにまで手紙を送り、ユリアヌスに遠征を思いとどまるように諫言している。

「……………」

「……………」

それつきり、女二人の間に沈黙が続いた。思えば、トゥルートをシャハラザードと結びつけていたのも、ユリアヌスに他ならなかつた。

トゥルートは大きく溜め息をついた。そして、

「あたしはアレクサンドリアに行くよ。そこにでかい図書館があるんだろ？」

「アレクサンドリア図書館に？ たしかにあそこは世界最大の図書館だけ……」

「ほう。そうなのか？」

「一般常識です」シャハラザードは心底呆れたようだった。「ていうか、そんな事も知らないトゥルト姉さまが何の用？」

「招聘された」

「はあああああああ？」

シャハラザードは心底驚いたらしい。「な、なんて羨ま……こほん、ど、どういう理由で？」と続ける。

トゥルートは黙って、紙切れを渡す。

シャハラザードもさつと目を通して、その紙切れに書いた図面に気付いたらしい。

「な、何これ……錬金術？」

「『酸っぱくなった葡萄酒を美味しくする装置』だ」

「……鉛の鍋の事？」

言うまでもなく、葡萄酒も腐ると酸っぱくなる。この原因物質は酢酸なのだが、この酢酸を鉛と化合させると、酢酸鉛になる。そして、この酢酸鉛は甘い。だから、『酸っぱくなった葡萄酒を美味しくする装置』として、この頃、鉛鍋が重宝されていた。しかし……

「違う」

とトゥルートは首を振る。シャハラザードも図面が只の鉛鍋でない事は見向けているらしい。「そうよね。……どちらかというところアリストテレスが語っていた『海水を蒸留すれば、真水が

手に入る』装置に近い気が……」

トゥルートの見ええない角度で微笑した。シャハラザードの反応が一々ユリアヌスにそっくりなのだ。結局、この二人は教養人という点で、性別も人種も超えて、同族なのだろう。

ユリアヌスが死に際に語った哲学論義——実のところ、トゥルートにはさっぱりだった。

しかし、もしも、あの場にシャハラザードがいれば、ユリアヌスの最期の叡智を後世に残す事ができたかもしれない。

それが何故か無性に悔しい。だから、トゥルートは顔を見せずに言葉を続ける。

「鉛鍋で煮ると酒精が弱くなるだろ？ だから、あたしは酒精が弱くならず、いや、むしろ、酒精を強くして、『酸っぱくなつた葡萄酒を美味しくする装置』がないか、昔から考えていたんだ」

「……何でそんなに酒精にこだわるの？ というか、いつから酒を飲んでいたの？」

シャハラザードのツツコミはこの際無視する。

「蒸留機ってあるだろ？」

「ああ、花の蜜から、香水を集める時に使うあれね」

「あたしは葡萄酒のある種の蒸留機にかけると、美味くなる事に気付いたんだよ」

「な、何ですってー！」

これは後世なら、『ワインを蒸留するとブランデーになる』と、一言で片づけられるだろう。しかし、この時代、そういった原理の抽象にはまるで至っていない。定量的に言えば、五百年以上、時代を先取りしている。

「そ、そういうえば、エチオピアで麦酒を蒸留する話を聞いた事があるわね……」

というシャハラザードの独白が示すように、あくまでも断片的、偶発的な事例にとどまっている。だが、トゥルートの考案した『酸っぱくなつた葡萄酒を美味しくする装置』には、これを普遍化できる可能性が秘められている。

「ああ、麦酒ビールをこの装置にかけたら、ローマ人が言う命の水アクアピット——あたしらの地元で言う『ウイスゲ・ベール』になつたぞ」

「………！」

トゥルートが説明すると、シャハラザードはそれこそ酔つたかのようにふらついた。情勢が比較的安定している頃、トゥルートはこの装置を自作した。そして、古くなった酒を安く買い集めては、一人で蒸留して痛飲して楽しんでいたのだ。それがある時、ユリアヌスに見つかり、今のシャハラザードと似たようなやりとりの末、知り合いの錬金術師とやらを紹介された。

錬金術師は当初この成果を独占しようとしたらしい。トゥルートから、大まかな手法を聞きとつた後、資料や機材が揃つたアレクサンドリアで再現実験を試みた。しかし、それは一定の成果は上げたものの、トゥルートが作った装置の性能には及ばなかつたらしい。

「だから、あたしにアレクサンドリアに来て欲しいんだってさ」

「……あなたって、お酒の事になると、異様な情熱と才能を示すわね」

「ガリア育ちだからな」

ユリアヌスは野蛮だが質実でもあるガリアの気風と愛していた。それでも、飲酒が甚だしい事だけは、何度も愚痴っている。

「ま、いいけど、お腹に子供がいる間だけは一滴たりとも飲んじゃ駄目よ」

「……気付いていたのか？」

「この非処女め」シャハラザードは毒づく。「ユリアヌス様もそうだったけどさ、わたしの事、処女だからって馬鹿にしていない？ はっ、どうせわたしはエセ売女ですよ。二十歳過ぎても男性経験皆無な喪女ですよー」

「馬鹿になんてしてないさ。むしろ、尊敬しているよ」

この時点でトゥルートは察していた。所詮、トゥルートは野蛮人だ。ユリアヌスの後継者になれるはずもない。現ローマ皇帝であるヨウイアヌスですら、自分には無理だと言っていた。

しかし……、

「あたしは遺児を育てる事しかできない。でも、お前は遺志を育てられるかもしれない」

「……自信がない。だから、手伝って——って言う心算つもりだった」シャハラザードは膝をつく。

涙は——随分前に枯れ果てていたらしい。「ははっ。わたしって、いつもこうね。結局、誰かに縋りついてばかり。自らの足で立とうとしない」

皆、同じだ。

キリスト教徒は神に縋り、トゥルートやシャハラザードはユリアヌスに縋った。

その結果がこれなのだ。ヨウイアヌスの言葉が嫌でも甦る。誰もユリアヌスのように運命に立ち向かおうとはしなかったのだ。

ただ、唯一シャハラザードにはまだ光が残っていたらしい。再び訪れた沈黙を破ったのは、黒髪の彼女の方だった。

「——わたしは≪アルフ・ライラ・ワ・ライラ千夜一夜物語≫に行く」

「アラブ民族クライシユ派解放戦線……か？」

対ペルシャ戦闘では、アラブ民族もローマ軍団と肩を並べて戦った。とりわけ、アラブ民族クライシユ派解放戦線≪アルフ・ライラ・ワ・ライラ千夜一夜物語≫などはササン朝打倒を理念としており、元々の利害が一致していたのだ。が、シャハラザードが駆けずり回って、ツテを用意してきた事も大きい。そして、その秘密結社との繋がりもまだ消えていないらしい。

「うん。今のアラブ民族はゲルマン民族並みの野蛮人だけどさ。ローマやペルシャも超えて、次の叡智を切り拓けるとしたら、それは、ああいふ連中かもしれないって思うしね」

相変わらず、底知れない女だ。あるいは、シヤハラザードの名はユリアヌスの名よりも世に鳴り響くかもしれない。

思い起こせば、トゥルートのユリアヌスと出会った時、彼は二十四歳だった。その歳まで、兵舎を見た事すらなかった童貞野郎が、たった十年で世界の流れを変えかけた。今のシャハラザードもちょうど二十四歳である。この処女に同じ事が出来ない理由はない。

「まー、当分は文字通り雌伏の予定だから、ユリアヌス様の伝記を書いていきますよ」

シャハラザードは語り部らしい事を言った。実はアンミアヌスも似たような事を考えているらしい。だが、シャハラザードは彼よりも、ずっと通俗的に書いてみたいそうだ。読み易さを重んじる。だから、会話を多くする。オッサン連中を控えめにして、美少女分を多めにする。できれば、挿絵も付けて、十代の少年少女の冒険心をくすぐるようにしたいという。

「んー、それなら、あたしにも読めるか？」

「アレクサンドリア図書館にいらっしやるなら、献本しますよ。姉さま」

「題名は？ もう決まったのか？」

「そうですね…：題名は…：」

多分著作は散逸するだろう。実際、トゥルートの革新的な蒸留装置ですら、この後に訪れる暗黒時代に失われてしまう。この約五十年後にアレクサンドリア図書館が青少年健全育成を謳う狂信的なキリスト教徒の手で、放火され破壊されるからだ。…：しかしそれでも、はるかな未来にその息吹が残ればいい。ユリアヌスが生きた時代が古代と呼ばれるような世界で語り継がれればいい。

シャハラザードは意識してドヤ顔を作っていた。かつてのユリアヌスがつまない同人誌を發表した時のように。

「そう、さしずめ——『とある古代のアポスタタ背教者』…：…：！」

「了」